ASLE-Japan／文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

October 31, 2013, No. 35

【役員名簿（2012-2014）】（五十音順）

代　表：管　啓次郎（明治大学）
副代表：結城　正美（金沢大学）
顧　問：上遠　恵子（レイチェル・カーソン日本協会）
　　西村　頼男（阪南大学名誉教授）
事務局長：高橋　綾子（長岡技術科学大学）
事務局補佐：
　　辻　　和彦（近畿大学）
　　山本　洋平（戸板女子短期大学）
会　計：相原　優子（武蔵野美術大学）
　　林　　直生（滋賀大学）
監　事：上岡　克己（高知大学）
ニューズレター編集委員：
　　浅井　千晶（千里金蘭大学）
　　巴山　岳人（和歌山大学・非）
　　村上　清敏（金沢大学）
会誌編集委員：
　　小谷　一明（新潟県立大学）
　　木下　　卓（愛媛大学名誉教授）
　　黒崎真由美（湘北短期大学）
　　波戸岡景太（明治大学）
　　John Rippey（滋賀県立大学）
コンピューターセンター：
　　岩政　伸治（白百合女子大学）
　　北国　伸隆（萩光塩学院）
　　山城　　新（琉球大学）
評議員：Bruce Allen（清泉女子大学）
　　池田　志郎（熊本大学）
　　石幡　直樹（東北大学）
　　太田　雅孝（大東文化大学）
　　茅野　佳子（明星大学）
　　塩田　　弘（広島修道大学）
　　高橋　龍夫（専修大学）
　　高橋　　勤（九州大学）
　　高橋　昌子（三重大学）
　　巽　　孝之（慶応義塾大学）
　　豊里　真弓（札幌大学）
　　中川　僚子（聖心女子大学）
　　平塚　博子（日本大学）
　　横田　由理（大東文化大学・非）
　　吉田　美津（松山大学）
院生代表：山田　悠介（立教大学・院）
広　報：大野　美砂（東京海洋大学）
　　喜納　育江（琉球大学）
　　河野　千絵（日本大学・非）
研究助成：岡島　成行（大妻女子大学）
　　乳井　昌史（早稲田大学）
　　野田　研一（立教大学）
　　山里　勝己（名桜大学）
　　管　啓次郎（代表）
　　結城　正美（副代表）

十和田、奥入瀬の土地から

代表　管　啓次郎（明治大学）

土地に名前はなかった。人による言語的刻みを受けるまえ、すべての土地はありのままのひろがりだった。土地や区域の名前の中でも、「県」の名前などはどれも新しいものばかりだろう。歴史を調べたことはないけれど、廃藩置県のあとも県同士が統合され、古い名前は失われ、新しい名前が生まれたことだろう。そして新しい名前に行きついた経緯は、だいたい無根拠なことが多いのではないだろうか。子供のころから感心してきたのは「愛知」県。なんという哲学的エリア。あるいは「岩手」県。生命を得たSF的な鉱物を思わせる。そして「青森」県は、その美しさの印象においてきわだっている。数年前、初めて青森を訪れて、青い森という表現が文字通りの現実だと知り、陶然とする気分に誘われた。遠い山並みがさまざまな濃淡の青をもって重ね描きされ、そのどれもが緑に埋めつくされている。森は濃密な気配をただよわせ、高緯度の海岸はひたすらさわやか。そこは、まるでメイン州のような、憧れの土地となった。

この秋にいたる半年ほどのあいだ、青森のことが頭を去らなかった。それもより特定的にいって県の中央部、十和田奥入瀬地域だ。十和田市現代美術館が開館五周年をむかえ、それを記念して「十和田奥入瀬芸術祭」が開催されることになったからだ。キュレーター・チームに誘われて、ぼくは出品作品のひとつとしての本を編集することを依頼された。これは、これ自体、新鮮な考え方だと思う。本は美術品ではない。複製品であり、商品だ。だが本の利点は、それがその場を離れて、遠い土地をみずから放浪するようにして流通することができること。土地とそこに降りつもる時間を主題とするこの美術展で、展覧会が展開される地域と日本列島の他の地域を、ある程度の強度をもってむすびつける、ポータブルな乗り物としての役目を果たしてくれるのではないか。いわゆる展覧会カタログにはしなくていい。美術作品の解説や関連情報はウェブページで事足りる。コンセプトばかりを前面に押し出しても、それでは土地の魅力は伝わらない。思い描けない。だったらどうするか？　物語を集めよう。そこから出発した。

この一帯は強烈に魅力的な土地で、その魅力が地水火風の運動と造形に由来することは疑いをいれない。すべてを統べるように八甲田山がある。このあたりの山々の連なりはどれもが、いうまでもなく火山の噴火活動によって途方もない年月のあいだに作られてきた

ものだ。地下には、いまも火の流れがある。温泉が、火により温められた水が、いたるところで湧いてくる。火山とわれわれが呼ぶのは要するに火口とそれを取り巻く隆起のことで、噴火すれば飛散する熔岩塊のことだ。そしてその隆起は傾斜を与える、流れを始動させる。われわれの物語集は、たとえばそんな火と水と土のトポロジーをなぞるかたちで構成することにした。

まず、十和田湖。太古の火山が爆発し、ぽっかりと開いたその火口に雪解け水が溜まりつづける。それは巨大な自然の水瓶となり、あふれそうなほどの水量を貯える。その重い水に耐えきれなくなったあるとき、縁の一部が決壊し大洪水が起きる。強烈な勢いの濁流が、北へ、北へ、溶岩の台地を削りながら流れ、その勢いは平野部に達すれば少しは弱まるものの、水自体は太平洋に達するまでおさまらなかったことだろう。この原初の洪水が刻んだ溝をなぞるようにして、それからは年ごとの水がしだいに深い渓谷を地表にえぐっていった。こうしてできたのが奥入瀬渓流だ。

生まれた溶岩の谷に緑はなかった。水はたっぷりある。流れの水のみならず、大気も十分な水をもたらした。太平洋に寒流が流れるこの地方では夏にもヤマセと呼ばれる冷たく湿った北東風がオホーツク海気団から吹き込むのだ。この水が溶岩の表面に苔を育てた。緑のやわらかい層がしだいに厚みをまし、そこに鳥か獣が運んだ樹木の種が発芽する。森がはじまる。森ははじまろうとするが、あまりに浅い土壌のせいで、よく倒れる。倒れれば、朽ちてゆくその倒木を糧として、さらに木々が育とうとする。その意志の強さ、大きさ。どれだけの年月がかかるのかは人間の尺度を超えているが、こうしていま見られるような緑のゾーンがここに成立した。

流れがいま焼山と呼ばれるあたりから平野部に出てしまうと、森は途切れ荒涼とした火山灰の平原がひろがっていたことだろう。入植した人々による耕作がはじまるまえには、このあたりは草原だった。いつか人が大陸から持ち込んだものの子孫にはちがいないが、野生化した馬たちの群れが疾駆する大地。人口のごく少ない地方だった。現在の十和田市とその周辺の開発の歴史は、よくわかっている。それは地質学や自然史の時間からすると、あまりに最近の、直近の、近代の、出来事にすぎない。稲生川と名付けられた農業用水が引かれ、都市計画を感じさせるグリッド状の町が成立した。ここに「軍馬補充部」が置かれ、近代日本の軍備の一翼を、このあいだまで自由を謳歌していた馬たちが担うことになったのだ。

湖、川、平原。大きな空の圧倒的なひろがりの下で押しつぶされそうな、でも強い生命力を感じさせる明るい光にみちたこの土地を構成するこれら三つのトポスを訪ねながら、ぼくは裸の土地を流れるいくつかの重層的な時間のことを考えた。一万年、千年、百年のオーダーを渡れば、目に見える土地の姿はがらりと変わってくる。しかしそのどれもがたしかにここで起きたこと、起きつつあることの反映であり、痕跡は必ずここに残っている。見えなくなっているだけだ。わからなくなっているだけだ。それを、自分の手足と想像力をつかって取り戻そうとする、そんな意志的な旅ができないものだろうか？

三人の小説家に、われわれのいわば代理人としてこの土地への旅に出てもらい、それぞれのトポスを書いてもらうことにした。湖を小林エリカさん。渓流を石田千さん。平原と町を小野正嗣さん。まったくタイプのちがう三人が、場所に鋭敏に反応し、じつに魅力的な物語をつむいでくれた。こうしてできたのが『十和田、奥入瀬　水と土地をめぐる旅』（青幻社）。現代日本の代表的写真家のひとりである畠山直哉さんがこのエリアを三度にわたって歩き走り撮影してきた写真群が、土地の現実の姿を垣間見せてくれる。物語と写真が、たぶんこの土地にこれまで縁がなかった人たちをも、そこに接近させてくれるだろう。そしてわれわれは、日ごろ忘れている地学と地理に対する感受性を、少しだけ取り戻すきっかけを手にするだろう。旅の大きな目的のひとつは、その土地を裸の姿において見ること、想像すること。人間世界と自然との界面を見分けようとするわれわれにとっても、それは大切な基本作業になるのではないだろうか。まず、水の流れを。そんな単純な合言葉に立つ旅に、また出かけてみたい。

第19回ASLE-Japan／文学・環境学会 全国大会報告

（2013年８月31日[土]～９月３日[火]＠白百合女子大学、福島県南相馬市）

本年の全国大会も盛況のうちに幕を閉じました。今回は従来とは少し趣の異なった企画がおこなわれるなど、これからの全国大会の新たな可能性が示されていたように思います。各企画に参加された会員の方々に報告して頂きました。

〈第一日目：８月31日〉

●院生組織企画：「今つくりたい環境文学作品のアンソロジー（2013）」

戸谷　洋志（大阪大学・院）

今大会の院生企画では、山田悠介（立教大学・院）と戸谷洋志（大阪大学・院）が進行役を務めながら、「今つくりたい環境文学作品のアンソロジー（2013）」を開催した。一日目の午前10時開始という早い時間帯であったにも関らず、ご参加いただいた皆様に、心から御礼を申し上げたい。本企画は、2013年の「今」に新たな環境文学作品のアンソロジーを作るとしたら、どのようなものを作りたいかを議論する、という趣旨で行われた。本企画は前半と後半で議論のテーマを分け、前半ではどのようなテーマ、活用法をもったアンソロジーを作りたいかを議論し、後半ではアンソロジーにはどのような作品を所収したいかを議論した。

前半では、まずアンソロジーの様式やテーマに関する議論が起こった。読者が本に何を期待しているかによって、最適な様式は変わる。たとえば、作品の一部を抜粋して編纂するか、それとも短編を丸ごと収録するかで、本の性格は大きく変わるだろう。また、「今」を意識した時事的なテーマとしては何があるのか、あるいは「環境文学」というジャンルの基本的な定義はどのように捉えるべきなのかについて、多方面から鋭い指摘が飛び交った。

後半では、二つの班に分かれて、各自がアンソロジーに収録したい作品を紹介した。原発、マイノリティ、黒人、女性、動物などをテーマとする多彩な作品群が提示された。他方で、環境文学という概念そのものを問い直す試金石として、一つのキーワードに対して二つの正反対の作品を所収するという実験的な試みも提案された。たとえば、「動物」をキーワードにして、科学的・博物誌的な動物観の作品と、擬人的な動物観の作品とを収録する、という試みである。

参加者は本企画を通じて、ここ十数年の間に、環境文学の射程が広範に、かつ多彩に拡大しつつある現状を共有することができた。本企画で得られた気付きや問題意識が、各人のさらなる考察の一助となることを願っている。

●映画上映とパネル：『祝の島』
●大会基調講演：創作家 ドリアン 助川 氏のアルルカンシアター

山田　悠介（立教大学・院）

2013年度全国大会第一日目の午後の二つのプログラムに、多くの参加者は時が経つのも忘れて引き込まれたのではないかと思う。言葉と歌と映像が織り成す世界。映画と、歌とかたりの見事な共演に。

纐纈あや監督の映画『祝の島』（2010年）は、山口県上関町祝島で、30年近くに亘って原発反対運動を続けている島民の姿を追ったドキュメンタリーである。瀬戸内海に面したこの島の対岸に原発建設計画が持ち上がったのは1982年のこと。爾来、島の一部の人々は、反対運動のある生活を送ってきた（それは、今この瞬間も続いている）。上映されたフィルムに映し出されたのは、自然豊かな島の風景とそこに暮らす人々。そして、定期的に行われる原発反対のデモや集会が、シュプレヒコールが、原発推進派との諍いが、「日常」の一部になっているという現実。島の人々が原発によって反対派と推進派に二分され、誰も望んでいない戦いを強いられていることに、ただ言葉を失う。

続いて、「創作家ドリアン助川氏のアルルカンシアター『ブカレスト～プノンペン～フクシマ』」が、カフェテリアに場所を移して上演された。ドリアン助川氏が

旅した、東西ドイツ統一へ向かうベルリン、東欧、戦争で荒れたプノンペンの写真がカフェテリアの壁に次々と映し出され、1980年代最後の年から90年代初頭にかけての激動の時代が、二人の道化師（ドリアン助川氏とピクルス田村氏）の歌と言葉で〈いま･ここ〉に現出する。やがて舞台は2012年の夏へ。ドリアン助川氏が線量計を手に『奥の細道』の旅程を自転車で辿った記録のかたり。地名と、時に耳を疑うような「○○マイクロシーベルト！」のリフレインのなかで、東北の〈いま〉と、祝島の人々と、体制に人生を翻弄された異国の人々の姿が、いつしか重なり合ってゆく。

私たちは、たまさか生まれ合わせたその時代に、たまさか生まれ合わせたその場所で、生きていくしかない。生まれる時代も、生まれる場所も選ぶことができない私たちは、これからどんな場所を、どんな時代を創るのか。暑かった８月の終わりに、そう問いかけられた気がした。

〈第二日目：９月１日〉

●個人発表：比較文学セッション

黒崎真由美（湘北短期大学）

常々、文学・環境学会の守備範囲の広さには圧倒されていますが、今大会の比較文学セッションの発表でその思いはより強いものになりました。自然／環境を共通項とする３つの新しい世界をご紹介いただきました。

最初に発表された高野忍氏は、日本文学に描かれてきた気象、そしてそれを人間が操作するという気候操作について考察されました。ここ数年、世界中で気候変動の危機が叫ばれていますが、その対策として気候システムに工学的に介入する気候工学に注目が集まっているとのこと。気候変動の原因が人間活動であろうとなかろうと、人間が気候を操作するということの意味を、おりしも猛暑の今夏、考えさせられました。

猪俣佳瑞美氏のご発表は、人文科学の観点から「鉢植え」を表象的に取り上げるという斬新な内容でした。本発表では主に邦画『誰も知らない』と洋画『ET』に象徴的に描かれた「鉢植え」に深い考察が加えられました。前者では親に置き去りにされた主人公の子どもが育てるカップヌードルの容器に植えられた植物が、後者では主人公の少年の妹からETへのプレゼントが「鉢植え」です。「鉢植え」は未熟さ等の象徴であり、「鉢植え」と子どもとの関係についても検証されました。カップヌードルの「鉢植え」のイメージが、いつまでも心に掛かりました。

三人目の中川僚子氏は、近代日本における『フランケンシュタイン』（1818）受容に注目して〈怪物〉象徴の意味を探られました。同作品の抄訳は、明治中期に欧化の精神に基づいて高等女学校の教員が創刊した雑誌に掲載されました。そこに描かれた怪物の挿絵は小林清親による和洋折衷画。（今日のボルトの突き刺さったイメージとは大きく異なります！）『フランケンシュタイン』の怪物は、欧化と伝統が交錯する時代の中で、複数の意味を持っていったようです。

最後に、このような多様なテーマの発表の司会をご担当くださった芳賀浩一氏、有為楠泉氏に感謝を申し上げ、報告を終了させていただきます。

●個人発表：英米文学セッション

浜本　隆三（徳島文理大学）

学会２日目に開催された個人発表の英米文学セッションでは、第１部と第２部それぞれ２人の発表者が研究発表を行った。第１部では、席芳媛氏の「『おお、開拓者よ！』に見られる女性化された自然」と中川直子氏の「アニー・ディラードにおける音のある言語風景：Topology, palimpsest, silence」が、ブルース・アレン氏の司会により報告された。第２部では、内藤貴子氏の「シヴォーン・ダウド『ボグ・チャイルド』における場所性と湿地遺体のナラティヴィティ」、および浅井千晶氏の「The Sweet Bay Treeの樹の下で―Toni Morrisonが描く『ホーム』」が、中垣恒太郎氏の司会により報告された。

第１部、席氏は、ウィラ･キャザーの代表作『おお、開拓者よ！』に登場する主人公の父親と自然との関係に着目し、そこに男性の征服欲と、その対象となる女性化された自然を読み解く。一方、ときに災害をもたらし開拓を拒む自然の厳しい一面も指摘して、同作に描かれた自然の多面性とその同時代的意義を論じた。中川氏はアニー・ディラードの回想記に描かれた自然との経験を、他者とのパースペクティブの交換が行われる遭遇体験と、時空を超えた無音かつ無意識の状態へと至る没頭体験とに分類した。そして、意識化し、言語化されたこれらの経験の意義を、表題に並ぶキーワードを交えながら論じた。

第２部、内藤氏は、アイルランド系児童文学作家シヴォーン・ダウドのカーネギー賞受賞作『ボグ・チャイルド』が舞台とする北アイルランド、アルスター地方の国境線に広がる湿地帯（Bog）の重層的な場所性を論じた。主人公の少年の視点を交えながら同地の空間的特質を分析することで、社会的・政治的に構築されてきた湿地帯の自然表象を解き明かした。浅井氏は、月桂樹の象徴性に着目しながらトニ・モリスンの最新作『ホーム』を読む。樹の根元に過去の暗い事件を再埋葬した黒人兄妹は、そこに安心して帰ることができる新たな居場所（ホーム）を見出し、未来への希望をもつ。モリスンが月桂樹の象徴性と重ねた重層的な意味を明らかにした。

●基調講演：舟崎 克彦 氏
「東京の自然とファンタジーの誕生」

横田　由理（大東文化大学・非）

白いスーツで颯爽と登場された舟崎克彦氏は、『ぽっぺん先生』シリーズをはじめとする多くの作品を世に出してこられた作家であり、今大会の会場校である白百合女子大学の教授でもある。ご講演は豊かな自然がまだ残っていた少年時代の思い出から始まった。千川上水のカメやタガメ、玉虫、優曇華（カゲロウの幼虫）、こうした生き物たちを相手に遊び、庭先でフクロウがなく牧歌的な雰囲気の中で過ごした子供の頃のことを生き生きと語られた。特に印象に残ったのは鳥マニアになられた舟崎氏がアカゲラやルリカケスなどを飼っていたという２畳ちょっとという大きな「鳥かご」であった。小学生の間は「鳥三昧」であったのが思春期になり鳥が懐かなくなり、ある日鳥を全て解き放ってしまわれる。それはちょうど近代化の波が押し寄せ、雑木林が建売住宅地に代わった頃だった。こうした少年時代の思い出は国際アンデルセン賞受賞作である『雨の動物園』に描かれている。サラリーマン生活を経験された後、ファンタジー作家になられ、元夫人と共作で作品を出されていった。最初の長編『ぽっぺん先生の日曜日』から「食物連鎖」、「輪廻転生」、「チャンバラ」の３つを回転軸に物語を制作される。『ぽっぺん先生と帰らずの沼』は、ぽっぺん先生がウスバカゲロウに転身し、エレファント・フィッシュに飲まれ、それが池のカワセミに食べられるといったように、食物連鎖の旅のファンタジー作品となっている。ノスタルジーや単なる自然讃歌ではなく、失われた環境を取り戻したいのだと言われ、最後にグラフィック賞受賞作である詩の絵本『あのこがみえる』を朗読された。質疑応答では、ぽっぺん先生の名づけの由来、作品のストーリーの核の部分には自然があること、動物物語の擬人法についてなど、創作上のご苦労も披露された。舟崎氏の作品世界の基礎となった武蔵野の自然と会場校の自然豊かなキャンパスが混然一体となったすばらしいご講演だった。

〈第三～四日目：９月２～３日〉

●福島被災地視察と野生動物調査

北国　伸隆（萩光塩学院）

「福島へ行くと、人は変わる。南相馬や飯舘での経験のあと、人は同じ人ではいられない。ぼくは、積極的になっている。ぼくは、泣きやすくなった。ぼくは……変人に見られることを厭わなくなった。人生において大事なことをするのに躊躇がなくなった。より本気になった。しかも、より馬鹿になった。」……福島から戻って三日目の夕方、ぼくはそうツイートした。

つまりは、ぼくはよりよくなったのだ。本来そうあるべき状態になった。刺激され、力づけられたのだ。

なぜなのだろう。

ぼくは、彼らの痛みを知った。表面上快活な彼らは内部に癒しがたい痛みを抱えて生きている。南相馬の人たちは誰もが「つい最近」大事な人を亡くしている。その上、放射能に脅かされている。子どもも若者もみんな、そうなのだ。その痛みのことは確かに、深く思った。

（南相馬の浦尻付近、福島第一原発から12㎞の海岸沿いです。今年の５月まで海水に浸かっていた喫水線が、流されてきた波消しブロックのフジツボの生息跡で分かります。こうした津波の跡の記憶を、それぞれの感性でフロッタージュにしました。［撮影・キャプション：澤田由紀子］）

ぼくは、南相馬に触れた。南相馬を飲んで、食べた。南相馬の雨に打たれ、南相馬を紙に転写した。海岸で波打ち際まで歩き、水に触れ、小石を拾ってきた。水は、福島第一原発につながっている。波は、「つい最近」大津波になってここに押し寄せてきた波だが今は静か。身を屈めて、低い位置から波をみつめてわざわざ巨大化し、津波の恐怖を、浅くは想像した。浅い想像ではあったが、確かに怖かった。

ぼくは、泣いた。海岸には卒塔婆のような、木製の慰霊碑が立っていた。その根元に、色褪せたリコーダーと、小さな熊のぬいぐるみを見つけたのだ。亡くなったのだろう持ち主（子どもに違いない！）を思い、親の悲痛を思い、自分の子どものことを思い、子どもだったころの自分を思い、あらゆる子どものことを思い、ボロボロに泣いてしまった。

福島から日常の場へ戻ってきてからも、福島は見え続けた。現実の風景に重なって見えていた。通学する高校生たちを見れば、南相馬市原ノ町駅前の朝の光景が蘇った。

日常世界を、以前と同じ目では見られなくなった。以前と同じひ弱さでは生きられなくなったのだ。

第10回ASLE-US大会報告

10th ASLE Biennial Conference: “Changing Nature: Migrations, Energies, Limits”
(University of Kansas, May 28 - June 1, 2013)

清水　美貴（金沢大学・院）

今年の初夏に開催されたASLE-US大会の報告を、初めて参加された金沢大学院生の清水美貴さんにお願いしました。開催時期の都合などにより日本から参加することが難しい会員の方々も多くいらっしゃるかと思いますが、開催地の印象から各発表の具体的な内容まで、大会の様子がよく伝わってくる充実した報告をしてくださいました。

2013年５月28日から６月１日の５日間にわたり、カンザス大学にて第10回ASLE-US全国大会が開催された。私事ではあるが、今大会が初の学会参加であり、右も左もわからないまま、のこのことやってきてしまったために本稿は大会参加報告、というよりも学会体験記といったものなってしまうことを先にお詫びしたい。

カンザスシティ国際空港から車で小一時間ほどのところに、カンザス大学はある。大学までの道中、あの、乗り心地の悪い黄色いスクールバスの車窓からは、青々とした木々がずっと先まで見渡せた。カンザスといえば「Flat」とアメリカ人の友人から聞いてはいたが、その風景を見て納得した。どんよりした曇り空に、金沢を思わせるじめじめした空気、そしてこの地平線まで続く緑を目の当たりにし、当時留学していたネヴァダの砂漠からやってきた私は傘を忘れていたことに、そのとき気が付いた（そしてその後、豪雨にやられることになる）。さらに、滞在先の大学寮の中に貼られたトルネード警報を知らせるチラシを見て、ここがカンザスであることを思い知らされた。そして寮の受付をしていた学生が、寮の地下にトルネード用シェルターが備え付けられていることを教えてくれた。カンザスは、『オズの魔法使い』の舞台である。ドロシーはカンザスのトルネードに飛ばされたのだ。その土地やその気候によってファンタジーが少しだけリアリティを持つことをうれしく感じた。

さて、本題に入るが、今大会は “Changing Nature: Migrations, Energies, Limits” をテーマに行われた。一日のプログラムは朝の８時半から夕方の５時まで、30分の休憩をはさみながら、90分間ずつ、４つのセッションに分けられている。１つのセッションは、テーマごとに20ほどの教室に分けられ、一斉に始まる。一つのグループでは３人から４人の発表者が15分から20分の発表を行い、その後聞き手からの質問に答えていく、という形式である。

ASLE-Japanからは、滋賀県立大学のJohn Rippey先生、札幌大学の豊里真弓先生、金沢大学の結城正美先生、明星大学の茅野佳子先生、白百合女子大学の岩政伸治先生の５名が発表者として参加された。そのうち茅野先生と岩政先生を除く３名が “Satoyama: Ecology, Gender, and Ideology in the Iconic Landscape of Japan” というテーマで発表された。俳句などの文学における里山の表象や里山における農業衰退の歴史を概観されたり、また90年代以降、ノスタルジックな美的風景として里山が見なされているといったことが指摘された。アメリカで理想とされてきた原生自然とは対照的に、人が管理することによって生物多様性が維持されてきた自然の成功例である里山は、科学的な調査と再評価が近年少しずつ進んできているのも事実であり、今後さらなる研究が期待される。

この発表に関連して興味深かったのは、大会最終日の “Nature and Agriculture on the Great Plain” と題されたプレナリーである。University of Kansasの歴史学者であDonald Worsterによる “The Garden in the West” と、同じくUniversity of Kansasの生物学者、Wes Jacksonによる “New Roots for Agriculture” という発表である。カンザスの州旗に描かれた象徴的風景は直線で区切られた農地、緑の大地、（おそらく）ミズーリ川の奥に山が描かれる。カンザスの農地は神話的風景としての作られた西部の庭であり、その風景は、野生の自然に対する、支配された自然として捉えられたわけだ。そして、“New Roots for Agriculture” では、自然環境に負荷をかけないために、どういった土地に、どういった組み合わせで農作物を植えればよいのかといった研究が進められているということが報告された。

どちらも田舎の代名詞である日本の里山とカンザスの農地であるが、それぞれの風景に読み取られるものは日米の価値観や文化的背景の違いにより異なる。しかし、このように風景化された農業の場を（里山の場合、農地だけでなく二次林なども含まれるが）人文学的な見地から見直し、人間と環境が共存共栄できる関係を科学的に模索しようとする試みが日米において行われている、ということはすばらしい。これに限らず、今学会では文理を問わずあらゆる分野の研究者による発表があった。「環境」という分野はいたるところに入口がある。それが最大の魅力であると同時に、必須条件であるということを改めて痛感した。

テート・モダン美術館とハヤブサ

浅井　千晶（千里金蘭大学）

９月に英国を訪れた浅井千晶ニューズレター編集委員による、ロンドンとハヤブサにまつわるエッセイをお届けします。

今年９月７日から15日まで海外研修の引率でロンドンに滞在した。引率業務のあいまにはテート・モダン美術館に行こうと出発前から決めていた。というのも、今年初めに読んだ*Silent Spring Revisited*（2012）の後書きで、著者のConor Mark Jamesonがテート・モダンの煙突をハヤブサが止まり木にしていることについて詳しく語っており、それが強く印象に残っていたからだ。

ハヤブサ（peregrine falcon）は日本にも欧米にも広く分布しているが、嘴の先が鋭く、直線的に速く飛び、獲物を見つけると上空からすばやく急降下する様は古くから人々の心をつかんできた。イギリスのネイチャーライターJ. A. Bakerは「10年間ハヤブサを追ってきた。私はそれにとりつかれていた。ハヤブサは私にとっての聖杯だ」と著書*The Peregrine*（1967）に記している。ハヤブサは中世ヨーロッパ以降貴族のスポーツとして栄えた鷹狩りにも使われ、猛禽類の代表といってよい鳥だろう。

ハヤブサは英国南部では一時期ほとんど消滅した。それゆえJamesonは、ハヤブサは多くのものを象徴しうるが、テート・モダンの99メートルも高さがある煙突を止まり木にするハヤブサは、大都市ロンドンの市街地の再生とともに人間が市街地で野生の自然と共存できることの縮図だと記している。市街地に棲息するハヤブサをアーバンネイチャーの象徴とみなす見解は彼だけのものではない。*Beyond Romantic Ecocriticism: Toward Urbanatural Roosting*（2011）はhumanとnonhuman、cityとnatureといったしばしば二項対立的にとらえられる観念の境界を越えるものとして“roosting”（止まり木にすること）という行為に着目する興味深い本だが、その中でAshton Nicholsは“urbanatural roosting”の例として、ニューヨークのセントラルパーク界隈の超高層ビルにとまるハヤブサを挙げている。

私は今回テート・モダン美術館へ二度足を運んだ。最初は９月10日。ミレニアム記念事業による新ロンドン名物のひとつ、大観覧車ロンドン・アイでロンドンを一望した後、テムズ河南岸を東へ向かって歩くとミレニアム・ブリッジの手前にバンクサイド発電所を改造して2000年に開館したテート・モダンがある。ミレニアムの名が示すように、この一帯は西暦2000年を迎える前に再開発された場所である。テート・モダンで尋ねると、ハヤブサを見せているのは王立鳥類保護協会（RSPB）のボランティアで、ほぼ毎日広場に小型のバンをとめているとのこと。さっそく外に出ると「RSPB」と書かれた緑色のバンがあった。活動の紹介をして会員を募る一方、望遠鏡を据え付けて美術館を訪れる人や観光客にハヤブサを見せている。

秋はちょうどよい季節らしく、その日も一羽のハヤブサが煙突に止まっていた。肉眼では見えないが、高性能の望遠鏡のおかげで風にふわふわしている毛並みまで見える。実際にハヤブサをみた感動でその日はHolbornにある宿に帰った。少し詳しく知りたくなり、ロンドンを離れる前の14日、もう一度テート・モダンに行った。11時前に着くと、王立鳥類保護協会の人たちが望遠鏡を設営中だった。まだハヤブサは姿を見せていないというので、美術館の展示を見た後に戻ってみたが、今度は煙突の裏側に行ってしまったらしい。野生の鳥なのでいつ来るかは明言できないが、今来るつがいはこの煙突がお気に入りで、2003年からずっとここを止まり木にしているそうだ。さらに美術館を一巡りして戻ってみると望遠鏡の周りに人が集まっている。ハヤブサが来ている！　角度の異なる望遠鏡でゆっくりハヤブサの姿態を見せてもらうことができた。なぜこの煙突がいいのかボランティアに尋ねてみると、周囲をさっと見渡せて食糧が豊富にあること、煙突の表面がでこぼこしていて止まりやすいからだろうという答えが彼女から返ってきた。日本で読んだ本の内容をロンドンで自分の目で確かめられたすばらしい経験であった。

事務局より

■2013年度ASLE-Japan ／文学・環境学会全国大会総会のご報告

2013年９月１日（日、11：00－11：40）に、白百合女子大学キャンパス（東京都調布市緑ヶ丘１－25）R3201において、2013年度総会が開かれました。まず、審議事項として、2012年度会計報告および監査報告、2012年度予算案、一部役員改選案、終身会員制度案、2014年アジア圏ASLE合同シンポジウム開催案、ASLE-USからの大会Grant受理者選定要請について、審議を経て了承されました。会費の値上げについて事務局から提案をいたしましたが、審議見送りとなりました。続いて、会誌 ニューズレターの発行、現会員数（174名）、「会員書誌情報」更新と更なる情報提供についての呼びかけ、院生組織の活動、2012年12月開催ASLE-Taiwan主催アジア圏ASLE合同シンポジウム（台湾）参加報告および今後の連携について、ASLE-Japan20周年記念出版事業について、会誌のISSN登録についての報告がありました。なお、総会に先立って行われた役員会では、引き続き会計実態の改善に向けた対策をとる方向性が確認されました。白百合女子大学で行われた2013年全国大会では、実行委員長の岩政伸治さまに大変お世話になりましたこと、この場を借りてお礼申しあげます。

■2014年度ASLE-Japan ／文学・環境学会全国大会および東アジアASLEシンポジウム

来年度の全国大会は、山城委員を実行委員長として以下の日程で、名桜大学にて東アジアシンポジウムと同時開催といたします。

【2014年東アジアASLE合同シンポジウム】

と　き：2014年11月22日（土）～ 23日（日）
ところ：名桜大学（〒905-8585　沖縄県名護市字為又1220－1）

【2014年度ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会】

と　き：2014年11月24日（月）
ところ：名桜大学（〒905-8585　沖縄県名護市字為又1220－1）

＊日程およびプログラムの詳細については、確定次第、会員メーリングリストやASLE-Japanウェブサイトにてお知らせします。

■2014年全国大会での研究発表、ラウンドテーブル、シンポジウムを募集します。

タイトル、発表要旨（800字程度）、連絡先を下記までお送りください。（締め切り　2014年２月28日まで）
【送付先】〒903-0213　沖縄県中頭郡西原町千原１番地
琉球大学　法文学部　国際言語文化学科　山城新研究室

〈会費納入のお願い〉

例年通り、６月末発行のNewsletter 発送に合わせて振込用紙を同封しております。年会費（一般5,000円、学生2,000円）の納入をお願いいたします。

口座番号　01300-0-93821
加入者名　文学環境学会
（フリガナ：ブンガクカンキョウガッカイ）

〈会員情報の訂正・更新について〉

会員の皆様にお願いして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、すみやかに事務局補佐・辻（twain1910@gmail.com）までご連絡ください。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

広報より

広報委員会では、研究動向の情報共有を促進すべく、ASLE-J書誌情報リスト（http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/）を定期的に更新しています。ご出版やご活動など、皆様の最近の研究成果に関する情報を広報委員の大野美砂（misa@kaiyodai.ac.jp）までお送り下さい。特にまだ情報をお寄せいただいていない方々からのご連絡を心よりお待ちしております。（既に情報をお寄せ下さっている皆様におかれましては、どうぞ新しい情報のみをお送り下さい。）なお、今後は学会に寄贈していただいた書籍につきましても、書誌情報リストに掲載させていただきたいと思っております。たくさんの情報をお待ち申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。

広報委員　　喜納育江　大野美砂　河野千絵

編集後記

第19回全国大会の報告記事を中心とした本号、いかがでしたか。管代表はじめ、報告記事の依頼に快く応じてくださり、大会当日の熱気を活写してくださった皆様方にあらためて御礼申し上げます。今回より、NL編集委員会のメンバーが一新されました。前号まで編集の任にあたっておられた辻さん、塩田さん、山本さんに教えを乞いつつ、次号あたりから、少しずつ新味も出していきたいと考えています。会員の皆様には、新企画などご提案くださるようお願いいたします。

フェイスブックなるものが跋扈し、善男善女を虜にしていることは耳にしていますが、アナログから抜け切れない身としては、ニューズレターがこれからも会員諸兄姉の交流の場であり続けることを祈りたいと存じます。

（K・M）

ASLE-J

【発　行】
代表　　管啓次郎
事務局　長岡技術科学大学　高橋綾子
〒940-2188
新潟県長岡市上富岡町1603－1
Tel/Fax: 0258-47-9805（直通）
E-mail: tayako@vos.nagaokaut.ac.jp

【編　集】
編集代表　金沢大学国際学類　村上清敏
〒920-1192
石川県金沢市角間町
Tel：076-264-5827（直通）
E-mail: melville@staff.kanazawa-u.ac.jp